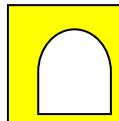


日吉台地下壕保存の会会報



第134号
日吉台地下壕保存の会

2018年度総会のお知らせ

私たちの会は平成元年に発足し、今年は30年目を迎える区切りの年です。諸先輩方が長年にわたって積み上げて来たさまざまな成果をもとに、私たちは運営委員を中心に、休むことなく地道な活動を続けて来ており、会報の発行は今回で134回目を数え、見学者数も昨年末までに35,000人となりました。ガイド養成講座も毎年開催し、現在第12期の講座を開催中ですが、この4年間では8名の新しいガイドが誕生し、日々見学会で活躍しています。

世界を見渡せば、世界の警察官から自国第一主義へと舵を切り替えた大統領の出現、長期政権基盤を固めているユーラシア大陸の諸大国、英国のEU離脱で揺れ動く欧州はじめ、終わりを見せそうもないテロとの戦い、新たな核兵器拡散の脅威など、世界の潮流は大きく揺れ動いており、将来がますます見渡せない状況になってきていると感じます。

言うまでもなく、あらゆるもののが殺戮と破壊をもたらすだけの戦争は、絶対に決して繰り返してはならないことであり、戦争という「最悪の選択」を避ける為にも「過去に学ぶ」ことはとても大切なことです。私たちは、これからも丁寧に地道に活動を続けてゆき、実際に戦争に使われた日吉の戦争遺跡を、少しでも多くの方に知って頂き、「真実」の中から「将来への賢い選択」が可能となるよう願いを込めて、活動を続けてゆきたいと思います。

今年も、2018年度の総会を以下の要領で開催します。記念講演は、慶應義塾大学名誉教授で、今までずっと当会を支え続けて頂いている白井厚（元当会顧問）氏より、お話し頂きます。会員の皆様には、新緑輝く日吉キャンパスに是非お越しいただけますよう、お知らせいたします。

日時：2018年6月9日（土）13:00～16:00

会場：慶應義塾日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース

記念講演 13:00～14:45

演題 「大学と戦争」から思うこと

講師 白井 厚 氏 慶應義塾大学名誉教授（社会思想史）

総会 15:00～16:00

- ・2017年度活動報告
- ・2017年度会計報告
- ・2017年度会計監査報告
- ・2018年度役員選出と承認
- ・2018年度活動方針の提案と承認
- ・2018年度予算の提案と承認

目次

卷頭言：2018年度総会のお知らせ	P1
お知らせ：2018 平和のための戦争展inよこはま 第22回戦争遺跡全国シンポジウム愛知豊川大会	P2
報告：第12期ガイド養成講座（鈴木京子さんの戦争体験）	P3-7
資料検討：軍令部第三部の移転は2月か3月か？	P7-9
報告：2017年度地域のつながり支援事業最終報告会	P-10
連載：海外の戦跡めぐり（8）外地の警備府 鎮海・韓国	P11
連載：日吉第一校舎ノート(14) 幾何学的なデザイン (2)	P12
連載：設備アレコレ (21) 海軍航空無線通信で暗号はどうしたのか？	P13-14
活動の記録（2～4月）：	P15-16

お知らせ

2018平和のための戦争展 in よこはま 5月29日・横浜大空襲から73年

6月1日(金)～6月3日(日) 横浜駅西口かながわ県民センター

展示 1階 展示場 10時～19時(6月3日は18時まで)

横浜大空襲 他 約500点(日吉台地下壕保存の会も展示参加)

特別企画 (2階ホール) 13時開場 13時30分～16時 資料代500円

6月2日(土)

挨拶と講演 「希望の灯を消さないために」 小山内美江子さん(実行委員長・脚本家)

朗読劇 「真昼の夕焼け」 五大路子さん(女優・横浜夢座座長)他

「焼け跡に生きる一戦争孤児の記録」 横浜市立日吉台中学校演劇部

報告 「私たちのキャンパスから見える戦争@横浜市大」グローカリー市大グループ

6月3日(日)

講演 「敵を作らない日本に」 小沼通二さん(慶應義塾大学名誉教授・世界平和アピール7人委員会事務局長)

報告 「船で繋ぐ想いー平和を紡ぐピースボート」 鈴木慧南さん(ヒバクシャ国際署名スタッフ)

講演 「草の根の運動が歴史を動かした」 和田征子さん(横浜原爆被災者の会会長・被団協事務局次長)

朗読 ノーベル平和賞授賞式の「サーロー節子さんの演説」奥山眞佐子さん(女優)

第22回戦争遺跡全国シンポジウム愛知豊川大会 2018年

日程 2018年8月18日(土) 13:00～全体会(記念講演・基調報告・地域報告)

17:30～全国交流会

19日(日) 9:00～15:00 分科会

15:10～16:00 閉会集会

20日(月)午前中 見学会(予定)

☆スケジュールと申し込み方法等詳細は次号(135号)でお知らせします。

報告

2018.3.10. ガイド養成講座第3回再録

東京航空計器学徒勤労動員と横浜大空襲の思い出

——神奈川女子師範学校生だった鈴木京子さんの戦争体験——

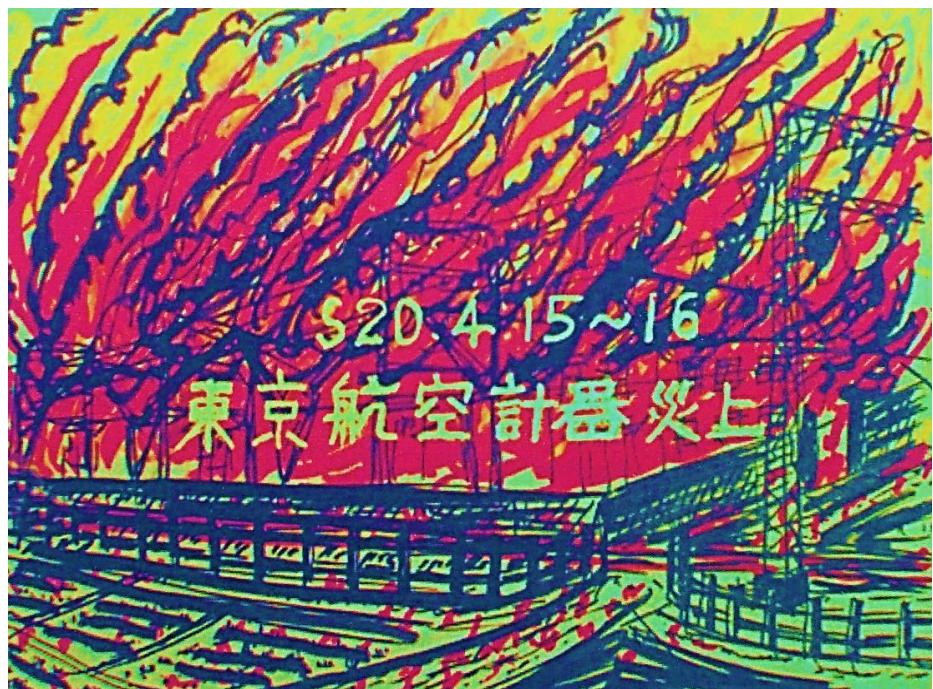
文責 山田譲 当日司会 山田譲・喜田美登里

鈴木さん：ご紹介にあずかりました鈴木京子です。若かった15歳の頃の、軍国少女のお話をさせていただきます。

《元住吉の東京航空計器勤務で機銃掃射も》

私は、生まれた所は川崎の中原なんです。父と母は広島から出てきました。私のゆかりの生まれた土地でこういうふうに皆さまとお話しできるというのは、ご縁ですね。その私が、ちょうど15歳で誠に強い軍国少女だったんですよ。日本の国は勝つに決まってる。大本営さま。日本の兵隊さん万歳の少女で。戦争が負けるなんてとても思ってませんで、一生懸命、戦争に加担しましたよ。それ一つが学徒動員です。師範学校（戦前の教員養成学校）へ、女学校を2年で中退しまして移ったんです。「師範へ行けば、お勉強を女学校よりたくさんできるから、そこにしろ」って親が言いましたから。師範に予科と本科とあります、師範の予科（教養課程）へと行ったんですね。ところが、親が言ったようには師範で勉強はできませんでした。1年生の1月ですね。東京航空計器という所へ勤労動員で行くことになったんです。その当時は軍国少女ですから、一生懸命です。元住吉の駅を降りて、みんな足並みそろえて、パッパッとね。下駄でカチカチと歩いて。守衛さんのところで「頭（かしら）、左」って号令かけちゃったんですよね。本当に軍国少女だったなど今、われながらびっくりしますね。

東京航空計器では何をやっていたかというと、飛行機の心臓部の、水平儀っていうんですね。飛行機が水平に飛んでいるかどうかを見る機械なんですね。それを作っていたんですけど、なかなか合格しないんですよね。ハンダの重さが違ったり、ヤスリのかけ方がまずかたりして不合格品ばっかりだったんです。工員さんも一生懸命、教えてくれるんですけどね。何しろ若い工員さんは、みんな兵隊さんで行っちゃいましたでしょう。ですから工員さんが少なかったですね。学徒動員の人たちがたくさんいても面倒見切れない。指導する人は大変でしたね。ですから、下手くそな私でも何とかオシャカ（不良品）を作らないように、兵隊さん的大事なものだからってヤスリをかけたり、ハンダやったり、バランスを取ったりでやりましたけど。今考えるとちょっと無理なことをやってたんだなと思います。でも、お国のためなの



東京航空計器炎上
(中野幹夫氏画“中原今昔かみしばい”より)

だから、めちゃくちや言わないでやらなきやと思って、毎日通っていました。

4月27日でしたか。「空襲だから、皆さん防空壕、行きますよ。集まってください」って大きな声で叫ばれましたから、みんな外へ出て。下駄履いてビタビタじゃんじゃん走って。井田というところの地下壕で横穴です。横穴へ入って空襲が終わるのを待ってたんですよね。

「大丈夫ですよ。皆さん出てらっしゃい」って、またぞろぞろ田んぼの、大八車がやっと通るぐらいの幅のあぜ道を歩いていたら、バリバリバリッて音がした。「伏せろ、田んぼへ落ちろ。落っこって小さくなれ」って誰かが叫んでくれた。そのとおり、やったんですよ。そしたらグラマンという飛行機がバーッと渡って、ビビビッと機銃掃射を飛行機の上から、私なんか狙い撃ちされたんですよ。幸い、叫び声で田んぼに小さくなっていたので、私の学校の、学徒動員の仲間は誰も撃たれませんでしたけど。どこかの学校の何人かの人は駄目だったそうです。怖かったですね。すぐそばで弾がはじけて、バババッといく。本当に命拾いいたしました。そういうことがあっても、また工場へ入って仕事をしました。そのうち、川崎の空襲のときかしら。私の家から赤い煙か、炎かがバーッと、ものすごい火事で、焼夷弾でやられた様子が目に入ったんですね。翌日、会社行ってみたら、工場はすっかり焼けて機械だけがニヨッキリと、立派な機械が焼けて茶色くなっていました。

こんなになっちゃったんだから、これからどうするんだろうと思いましたら、学校の先生がやって来られて、「動員先を変える。皆さんのいた所はこんなになってしまったから、これからは京浜急行の富岡の付近、谷津坂の大日本兵器へ動員変え」と決まって、そこへ行きました。そこでは、兵器ですから鉄砲の弾やなんか、兵隊さんが扱うものを作るんでしょうけど、材料箱は空っぽでした。「どうしたの。お兄さん教えてよ。あたしたち動員に来たのよ」って言ったら、「材料がないんですよ」って。動員に来た甲斐がないです。軍隊に物資がなかったんですね。

《大空襲直後の悲惨な横浜市街をテクテクと》

何のために動員されているのか分からぬようないい日が何日かあって、ある日、「皆さん、お帰りください」って言われたので、みんなでぞろぞろ下駄を履いて工場を出て、トンネルをくぐって横浜のほうへ向かったんです。そのとき横浜は真っ黒けに焼けて、焼夷弾で焼け野原になっていたんですよね。びっくりしましたね。残っていたのは野澤屋と二つの鉄筋コン

クリートの建物だけで、あとは全部ペチャンコ。何にもなくなってしまったですね。焼けたくすぶりで、ときどき炎がボッと上がる。「どうする?」と言って、しょうがないので線路の上を歩いていたんですね。「もう熱くて、下駄の鼻緒が焦げそうだから下へ降りようよ」って言って、京浜急行の線路から下りて。市電の日ノ出町のほうへ向かって歩き始めたんです。ところが、とても見られない光景だったんです。川沿いに歩道があって、歩道が全部、焼けトタンに覆われているんですよね。その下を見たら、無残なことに真っ黒けの人



講演される鈴木京子さん（お隣は元暗号兵の栗原啓二さん）

だとか、血だらけの人が。誰かが見るに見かねて、焼けトタンをかけたんでしょうね。それがずっと日ノ出町のほうまで続いているんです。びっくりしましたね。川を見たら、熱さに耐えられなくて飛び込んだ人が、いっぱい死んでるんです。すごい、仰天しましたね。だけど泣いちやいられない。「何とか帰ろうよ」と友達と下駄でコツコツと真っ黒に焼けた横浜の中をくすぐる煙を吸いながら歩いて。「桜木町のほうへ出れば学校へ行けるんじゃないの」と言って動き出しました。日ノ出町を過ぎた辺りで「おーい、あんたたちどこ行くんだよ」っていうトラックの上からの声で、川崎のほうの人が「川崎よ」って言ったら、「いいよ、乗れ」って。友達何人かは、そのトラックに乗せてもらって川崎へ帰りました。私は大倉山から50分ぐらいの新田というところですから、仕方がないので「学校へ行こうか、家までとても日があるうちに行かれないから」って、テクテクと煙を吸いながら。

麦田のトンネルがフェリス女学校の下にあって、そのトンネルをくぐって、その次の市電の大和町の停留所の丘の上に師範学校があったんです。やっとたどり着いた学校の寄宿舎は全部、焼けてしまっていました。本校舎が鉄筋コンクリートだったおかげで残っていました、

「家庭科室へ行きなさい」と言われたんで家庭科室へ行きましたら、学校で一番おつかない先生が「あんたたち、よく来たね。助かったんだよ。こっちへ来い」って言って、優しく、おにぎりをくれました。もう泣いてしまいましたね。藤井先生っていう寄宿舎の舍監で寄宿生に対しては大変厳しい先生だったんで、私たちもしかられるかと思いましたら優しい声で「座って。おにぎり食べて。今晚はここで寝るんだよ」って言ってくれて。命、助かったと思いましたね。

翌朝、同じ方向に帰る者たちが順々にうちへと向かったんですけども。電車は通りませんから、麦田のトンネルをくぐって桜木町駅、横浜は全部焼けてますから。横浜から青木橋を渡って、反町あたりを歩いていたら父親が来てくれたんですよ。「お父ちゃん」「京子か。良かったな」って言って、抱きついちゃいましたね。何人分かのおにぎりを持ってきました。長津田の友達も一緒でしたから、おにぎりをそこで食べ、そういうふうに爆撃された横浜を通ったんですけど。戦争ってやだな、もうこりごりだ。それが本音ですね。あの悲惨な、たくさん的人が死ぬ、家が焼ける、食べ物がなくなる。

そうこうするうちに広島にピカドンが落ちて、負け戦ということがはっきりして戦争が終わりました。横浜の町には親も亡くし家もない、真っ黒けの顔をした坊やたちがいっぱいいました。その子たち、何をやったか分かりますか。ご飯を食べるため、アメリカ兵の残した残飯を食べてたんですよ。私の父は、「京子たちには、ああいう思いをさせない。やるぞ、お父さんは、これから」と言って。父は学校の先生をしていましたけど、土曜の午後と日曜は百姓を始めました。私も泥だらけになって手伝いました。そのおかげで、私は生きていられたわけです。

だんだん学校も落ち着いてきて、お勉強も始まりました。戦争が終わったから潤沢な生活なんて、とんでもないことで、どこのうちに行っても配給米じや足りないんですよ。こんなに食べ物がなくなる。戦後というのは、すぐには復興しない。食べ物がこんなに少ない。学校給食が、そこで始まったんですよ。どこの子だって鼻つぶれて痩せ細ってましたよ。それから病気。トラホームなんかが勤めていた小学校の教室で広がっちゃったんですよ。アメリカ軍も日本の衛生状態が悪いということに気が付いて、何をしたかというと、DDTを頭からバーッとかけて。桜木町の駅で改札に入りましょうと思ったら、アメリカ兵が陣取ってて、全員、有無を言わせない。そうやらないとシラミが取れなかつたんですよ。

《広島の叔父、叔母はピカドンで被爆死》

それから、戦争に負けたのでアメリカ兵が入りましたでしょう。そしたら「横浜の女子どもは逃げろ」っていう命令が出たんです。父親が「京子、妹のナエ、ちょっと来い。すぐ支度しろ。広島に行くんだ」って。父母は広島の出だったんです。私は15歳、妹は二つ下ですから13歳ですか。2人で横浜駅へ行って、乗ろうと思っても満員で扉が開かないんですよね。中にいた人が「ここから乗んなさい」って窓から乗せてくれたんですよ。そうやって広島へ

行つたんです。母方の実家で山陽本線の山の中の、河内って駅なんですね。広島より手前です。そしたら、やっと着いたおばあちゃんのうちで、おばあちゃんと嫁さんが泣いてばっかりいるんですよね。「どうしたの、おばあちゃん」って言ったら「坂得（さかと）が死んじやつたんだよ」って。私の母の弟、叔父です。「ピカドンだよ」。原子爆弾なんていう言葉はなかったんですよ。叔母は毎日、広島へ行って叔父が死んだのはこの辺だっていうところを人から聞いて、「うちのお父さんの残したものはないかしら」と辺りを探しまくっても、何にも跡形もない。あまり通い過ぎて、叔母は12月に2次被爆で亡くなりました。怖いですね、原爆は落ちたところへ通っても駄目なんですね。戦争は、むごいものでした。どうか、この私たちの生活が平穏であるために、戦争がない世界であるように祈らずにはいられません。

《食料自給の農作業、空襲で校舎に爆弾直撃》

司会：同窓生の方がお見えですが、補足がありましたらお願ひできますか。

Iさん：昭和4年の生まれでその時は満州事変。そして成長と同時に支那事変、大東亜戦争と、戦争の中で若いときを過ごしたようなものです。師範学校で、私たちは同級生なんですね。ただ一つ、ありがたかったなって思うのは、私たちは同窓生が200人近くいるけれども、この戦争で命を落とした者は1人もいません。私は勤労動員に行かないで、食料を作るために瑞穂隊という隊をつくりまして、足りない食料を作るために農作業をしていました。弘明寺のほうにある農場に、大八車を引いて農作業に向かっていました。食糧難は始まっていましたからイナゴも食べました。ハコベも食べました。大豆をいった、いり豆は非常食で、お茶の缶に詰めて常時、備蓄して持っていました。ですから学校の教科のほうでも十分な勉強はできていない時代です。女の子なのに軍事教練をさせられました。竹やりを持って人を刺すっていうことから、薙刀から、手旗信号、そういう教練を受けました。物がないですから制服なんかありません。もんぺをはいて、胸に大きな名札を付けて、そこには必ず血液型を書いて、プライバシーなんかありません。

私は寄宿生でしたから、5月29日の横浜大空襲は真昼でしたけれども、学校で受けました。寄宿舎は木造。学校の付属小学校も木造ですから全部、焼けました。ただ、本校舎だけは鉄筋コンクリートで。地下1階、地上2階。ちょっと高い突起物がありましたから、飛行機から見たら軍部の何かに見えたんでしょう。校舎の屋上にも直撃弾を受けました。校舎の1カ所は穴が開いたまま、しばらく戦後もそのままでした。

私がそのとき何をしていたかというと、校舎のすぐ前に麦畑があり麦畑と道の下に横穴の防空壕があったので、麦畑をはうようにして防空壕に入りました。そのときに機銃掃射を受けました。B29が空を覆うように飛んてきて。全く低空です。そして機銃掃射を受けました。でも、この空襲で亡くなった者は1人もいなかったということは大変ありがたいことです。そういうような状態で、国鉄は保土ヶ谷、京浜急行は黄金町まで歩かなければ家へ帰ることはできません。ですから、何日かは穴の開いた校舎の中で、動員先から戻ってこられた友達と過ごしました。それで、電車に乗らないと私は帰れませんので、罹災証明書というのを頂くんですね。それを見せると乗り物はみんな、ただですから帰れるんです。ですけれど電車も午前中に1本とか。バスは木炭車ですから、午前中に1本、午後1本とかで。

学校もそんなですから、半年ぐらいは休んでて10月になって開かれたんじゃないでしょうか。学校が再開されましたけど、私たちはあんまり勉強しないで教師になったのかな、なんて思います。今思いますと日々、無事がありがたいって、本当にそれを実感して過ごしているんですけど、今の方たちにはそれが当たり前なんじゃないかなって思います。現在は平和に逆行するような、それが敬遠される社会情勢になっております。ですから、これからの方たちがどういうお考えを持たれるのか。どういう行動をなさるのか。戦争へと逆行することだけはやめていただきたいというのが私をはじめ、みんなの願いです。

《質疑応答 玉碎を立派と思い込まされていた》

司会：ありがとうございます。なにか質問はございますか。

A：戦争で死ぬ人がいなくなつたことは良いことだと思うんですけど、一方で、周りに死ぬ人がいないから死を直視する機会もなくなつてしまつたので、どっちがいいのか分かんなくなつちゃつたんですけど。どう考えればいいのか。

鈴木さん：難しいですね。良い答は、ないですね。

Iさん：私、麻原教祖の事件があつたときに、マインドコントロールって怖いなって思つたんです。でも事実、私たちマインドコントロールにあつて、戦争を随分進めたんだと思うんですね。私、教師になってから子どもに、「社会のことを考えるときに、知識としてうのみにするんじゃなくて、なぜっていうことをよく考えなさい」って言いました。やっぱり、なぜって考えることが必要なんじゃないかと思うんです。戦時中っていうのは軍部の力が強いせいもあって、新聞とかラジオは全部、なぜを伝えないで結果ばかり伝えて私たちを喜ばせていた気がするんですね。ですから、これからも子どもたちとか若い人たちには、何かあつたときに、なぜっていうことを考えていただくと今の質問の答が出てくるような気がするんですけども、いかがでしょうか。

司会：答はないけど、なぜかを考えましょうと。大事なことだと思います。他には？

B：鈴木さんのお話で「バリバリの軍国少女だった」ということで、終戦を迎えたときには戦争が終わつて負けた。その時の意識の変化は？

鈴木さん：悔しかつたですよ。何で大本営はちゃんと、私たちに正確に教えてなかつたかと思ひますね。戦争の途中で「硫黄島玉碎」とか、何々玉碎つていいますでしょう。ああいう言葉を使われば私みたいな軍国少女は、そこは全滅して敵をやつつけたんだなというふうに、敵もやられているとしか取れなかつたんですよ。ところが、日本のほうが負け戦だったわけですよね。それを玉碎というような言葉を使うから、私のような者はそのとおり、日本の兵隊さんつて立派なんだと取つちゃつたんですよ。ですから、国民に正確に戦況を報告しなかつた軍隊という、その元はどこなんでしょうね。そこを私は恨みますね。

B：悔しさ、怒りですね。半面、終わつてホッとした部分というのは全体の何割ぐらい？

鈴木さん：4割が悔しい。ホッとしたが6割でしたね、私はホッとしたほうが、やはり勝ります。

B：他の方は、いかがだったんでしょう。

Iさん：灯火管制というのがあって電気を消して寝ると空襲になつて、警戒警報が鳴ると非常袋を持って防空壕へ家庭でもみんな行つたんです。だから安眠というのがなかつたんですね。ですから戦争が終わつて寝られるなつていう実感はありました。

司会：どうもありがとうございました。

【当日は、日吉の連合艦隊司令部の元暗号兵だった栗原啓二さん（94才）にも来ていただき、お話をうかがいました。栗原さんからは、以前にも体験談をお聞きして会報の記事にしてあります、今回お聞きして新たにわかつたことなどについては、改めて報告いたします。】

資料検討

軍令部第3部の日吉移転は2月か3月か？

運営委員 山田譲

見学会用冊子の増刷・校正をしようとして、海軍軍令部第3部の日吉移転日をどう判断したらいいのか、考えてみました。慶應義塾大学との契約日が3月なので、私は見学会では移転日も3月という説明をしてきました。しかし2月という意見もありましたので、いろいろな資料を照らし合わせて、現在的に整理してみました。

(1) 軍令部第3部の日吉移転日についての資料

①増井潔元大尉への寺田さん聞き取り記録(生協ニュース 1988年4月第41号、10月43号)

増井氏は慶應義塾大学経済学部卒の予備士官で昭和17年1月主計中尉として海軍に入隊し、18年5月に軍令部第3部に転属しました。そして終戦まで実松譲元中佐（当時）の下で勤務しました。

- ・生協ニュース41号の聞き取り記事によれば、増井氏は小泉信三塾長と懇意で、第3部第5課（アメリカ他担当）課長竹内大佐の命で、小泉塾長に日吉校舎貸与を依頼し快諾を受け、教務主任に会い予科の校舎の南側を借り受けたこと。事務手続きは庶務課がやったこと。

「軍令部第3部は、19年2月初めに、すべて日吉に移転した。」と書かれています。

- ・生協ニュース43号には「第41号に既に述べたように、19年2月に軍令部第三部は日吉の予科の校舎（現在の高校校舎）に入ったが、寒い時期だったので床に板を張ったという。」と書かれています。

②実松譲元大佐の著作での記述

実松氏は海軍兵学校、海軍大学校卒の職業軍人でした。対米開戦時、在米大使館武官でしたが交換船で帰国。軍令部第3部第5課で中佐として「甲課員」で勤務しました。

- ・『大海軍惜別記』（1979年11月刊）には「昭和19年の春もまだ浅いころであった。……情報部は神奈川日吉の慶應義塾大学教養学部の校舎に移転する。」と書かれています。
- ・『日米情報戦記』（1980年4月刊）には「昭和19年初めのことだった。……神奈川日吉の慶應義塾大学教養部の校舎に移転することとなった。」と書かれています。

③『高松宮日記』



かつて軍令部第三部の入っていた第一校舎
(南側よりのぞむ)

裕仁天皇の弟である高松宮は軍令部第1部所属の海軍大佐で、第3部などいろいろな部署に首を突っ込み、日吉にもよく来ていたそうです。軍令部第3部作成の『敵側情報より見たる米国の戦後政策』も持っていました（生協ニュース43号）。しかし日吉の人事局の女性理事生にラブレターを送り、困ったその女性は同じ理事生の妹に断りの手紙を書いてもらったという話もあります

（その妹さんへの 2007.11.24. 山田による聞き取り）。その位、高松宮は日吉の海軍に出入りしていました。

- ・昭和19年3月9日（木）「高橋、日吉に三部と移る話、昨日もめてしまった。安達囁託にあやまって決めてもらう。三部、来週月曜から慶應予科で執務することになる。三部長だけこっちに残る。連絡わるくてこまるだろう。」
- ・3月13日（月）「六課日吉へ。高橋、伊藤、日吉へ。」（「六課」は中国、満州国担当）
- ・6月5日（火）「日吉慶應予科（七分室、十四分室）、海軍大学（五課、七課デ情況判断、人事局、高木少将）。」（「七課」は、イギリスを除くヨーロッパ各国担当）

(2) 慶應義塾と海軍との賃貸借契約書（『慶應義塾百年史』より）

- 最初の契約書の契約日は昭和19年3月10日で、契約者は海軍省経理局長山本丑之助と小泉信三塾長となっています。
- 「別紙 賃貸借土地建物ノ表示」によれば、貸借建物と第一校舎占有面積は徐々に、増やされていきました。

昭和19年3月10日～ 第一校舎 1256.20坪、寄宿舎 24.00坪、赤瓦食堂、第二控所

9月 1日～ 第一校舎 1479.00坪

9月 11日～ 体育専用室

9月 21日～ 寄宿舎（浴場共）979.76坪、同付属物置、第一館、第四館、柔剣道弓術空手及卓球道場（廊下便所共）

【10月 1日～ 工学部ロッカ一室 120坪を海軍水路部に貸与】

10月 11日～ 第一控所、第二校舎裏食堂（二階のみ）、学生文化団体専用室

12月 1日～ 教会堂

昭和20年1月～【日吉町822番地所有地約400平方メートルを運輸省航空試験所防空壕
切削用に貸与】

3月 11日～ 第一校舎 2054.35坪

【】内は、『百年史』の注記。

「体育専用室」は「木造瓦葺二階建」とあり、体育会本部建物と思われます。「第一館」「第四館」「第一控所」「第二控所」は第一校舎東側の建物（阿久沢武史さんの書いた『日吉第一校舎ノート（三）』を参照ください）です。「銃剣道弓術空手及卓球道場」はマムシ谷にありました。「学生文化団体専用室」というのは私はよくわかりません。なお、1944年3月10日に「寄宿舎24坪」貸与とあるのは、よくわからんが寄宿舎1棟の食堂部屋を貸与したのではないでしょうか？

(3) 移転は、やはり3月

以上からすると私は、軍令部第3部の日吉移転日は1944年3月と考えるのが妥当とおもいます。『高松宮日記』は日記なので当日か、せいぜい数日後に書かれており、日付けは、かなり信憑性が高いと思われます。他方、増井氏からの聞き取りは戦後40年以上たってからの記憶であり、本人が書いた手記でもありません。実松氏の本は、本によって記述がちょっと違うし、何月かという数字もありません。海軍の公式文書はほとんど焼却処分され存在しないので確定できませんが、高松宮日記によれば移転日は、3月13日に軍令部第3部第6課が移転ということになります。

他方、慶應義塾と海軍との賃貸借契約の期間は、10日から長くて3ヶ月であり、かなり短く、これを少しずつ更新しています。なぜそうしたのかはわかりませんが、このことからすると賃貸借契約日は実際の移転日＝使用開始日と、かなり近いのではないかとおもいます。使用面積も細かい数字で書かれており、賃借料を相当細かく計算していたようです。昭和19年3月10日の契約書では「賃借料トシテ13万57円72銭」と書かれています。

したがって、見学会用冊子の、これについての記述は今まで通り、移転は1944年3月ということでおもいます。なお現在（第8版以前）の冊子の年表では、「貸与」した日付けが「3月13日」となっていましたが、3月10日に訂正する必要があります。『高松宮日記』の移転日の記述を見て、以前、このように書いたのかもしれません、賃貸借契約日と実際の移転日が混ざり合った記述になってしまっていたようです。

報告**2017年度地域のチカラ応援事業「平成29年度最終報告会」**
運営委員 小山信雄

平成29年度地域のチカラ最終報告会
(来往舎シンポジウムスペースにて)

3月17日(土)、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにて、“地域のチカラ応援事業・平成29年度最終報告会”が開催されました。チャレンジコース19団体の内、10団体が発表を行うことになり、日吉台地下壕保存の会は前年度に引き続き、4年目となる発表を行いました。6名の応援事業推進懇話会委員の方々と約50名の参加者・観客の皆様に向かって、持ち時間8分間(時間厳守)の最終報告を行い、その後質疑応答となりました。

私達の主要テーマである「事業

名(ガイド養成・人材育成)の4年間を振り返って」という趣旨で報告を行いました。この間、合計29名(男性17名、女性12名)の受講生があり、現時点で8名(男性6名、女性2名)の新しいガイドが誕生し、日々の見学会で活躍している成果を報告しました。同時期の見学者数は9,500名となり、32%を学生(小・中・高・大学)が占めていますが、特記事項として、港北区内の中学校として初めて、全9クラス346名(横浜市立大綱中学校2年生)の見学会を実現させた事を取り上げました。授業の一環の為、平日3日間に分けての対応となりましたが、実現可能となった要因の第一は、対応出来るガイドが充実して来たことです。また、見学会での安全確保の更なる充実を図る為、港北区消防署日吉出張所、消防団の講師を招いて11名のガイドが救急救命講座を受講・修了した事も報告。

来年度は当事業も5年目の最終年を迎えますが、引き続き、ガイドの人員確保と質の向上を図って、日吉台地下壕を一人でも多くの人に知って貰えるよう努力してゆくことを報告しました。



2018.2.27
大綱中学2年生見学会 110名参加

連載**海外の戦跡めぐり (8) 外地の警備府 鎮海(チネ)／韓国
運営委員 佐藤宗達**

日露戦争(1904-1905)といえば日本海海戦です。連合艦隊の活躍は詳しく検証されておりますが、さて連合艦隊はどこにいたのでしょうか。

1905年2月連合艦隊旗艦三笠は朝鮮半島の鎮海湾に入り、連合艦隊は同地を基地として対馬海峡で訓練をしておりました。日韓併合前ですが1904年2月、日韓議定書を締結しております。第4条にて「・・大日本帝国政府は前項の目的を達する為軍略上必要な地点を臨機収容することを得る事」としています。

韓国の港といえば釜山港ですが当時は未だ小さな港で、釜山港の西50kmに位置する鎮海(発音はチネ)は水深が深く、湾が広く軍港に適しておりました。1904年1月巨済島

に仮根拠地防備隊が置かれ、その後鎮海湾防備隊、鎮海防備隊と改称。1916年4月、要港部に昇格、1941年11月警備府に昇格しております。戦後は韓国海軍基地となり軍港として機能しております。ここは桜の名所で日本軍が植えたものが残っております。毎年4月1-7日は桜祭りで一般公開されます。友人と往訪しましたが桜並木が続き基地一面が桜です。

さて小高い丘の上に本部があります。受付で旧日本海軍が使用していた基地跡の見学を申し出ましたが断られました。学術調査などでもないと許可にならないでしょう。さて外地にはもう2ヶ所警備府が置かれておりました。「台湾」澎湖島・馬公に1901年7月、要港部を開設、1941年11月警備府に昇格しております。入り組んだ湾は天然の要塞です。その後1943年7月に警備府を台湾本島の高雄に移しました。高雄市内は戦車が走行できるように道路、橋が整備された大軍港でした。今でも高雄・左営地区は軍港で立ち入り禁止となっております。



桜満開の鎮海海軍基地の入り口付近

鎮海にて展示されている、復元された亀甲船
(文禄・慶長の役で豊臣軍と交戦した船)

「中国・海南島」1939年2月、日本軍は援蒋ルート遮断のため、中国・海南島を占領し海南根拠地隊を置き 1940年9月の北部仏印進駐後は重要拠点であることから 1941年4月に警備府に昇格しております。ここでは台湾総督府から人的・技術的支援を受けて経済開発が行われていたため、終戦時多くの台湾人(当時は日本人)が取り残され、ジャンクなどで逃げ帰ったそうです。

(注) 鎮守府は内地に4ヶ所ありましたが 1905-1914年の間、清/中国・旅順にも鎮守府がありました。

連載

日吉第一校舎ノート (14) 幾何学的なデザイン (その2)

会長 阿久沢 武史



アール・デコのレリーフ

典型的なアール・デコはもう一箇所、正面玄関に向かって左端（校舎北側角）の壁にある。ここには中央にペンの徽章を置いた正方形のコンクリートパネルが据え付けられ（〈写真参照〉）、その下には四角いガラスブロックの一画があり、その前には世界地図が彫られたカップが置かれている。パネル中央のペンマークは長方形の枠の中に置かれ、その上下四列に四角形を組み合わせた図柄が並ぶ。図柄のデザインはすべて異なる。中央のペンマークの左には「1934」の西暦が、右には「2594」の皇紀が刻まれ、この数字デザインもまた典型的なアール・デコである。

建築史家の吉田鋼市は、『日本のアール・デコ建築入門』（王国社、2014年）で現存する代表的なアール・デコ建築を50件選び、写真とともに詳しく紹介している。昭和の初期、アール・デコ建築は数多く建てられたが、そのうちの多くは戦災で焼失、または甚大な被害を受け、残ったものも戦後の復興や高度経済成長の時代を経て、現在に至るまでの間に次々に姿を消していった。こうした中で、現在もなお竣工当時と変わらぬ用途で使われている建築物は、決して多くはない。日本の代表的なアール・デコ建築に数えられた50件のうち、学校建築はわずか5件であり、その中の一つに「慶應義塾高等学校」、すなわち第一校舎が取り上げられている。第一校舎は、現存する数少ない昭和初期のアール・デコ建築として、日本の近代建築史の上に位置づけることができる。

網戸武夫は、第一校舎の装飾に関連して、建築家としての自身の姿勢を次のように述べている（前掲『建築・経験とモラル』）。

話を日吉台に戻しますと、コンクリートというのは流し込みの鋳型のようなものです。つまり仮枠が主体ですから、その表現は鋳型、それは石積みのような組み積み方式ではないので、非常に自由な表現が可能になるわけです。自由ということは、一方では裏返すと奔放になり、もう一方は堕落する。装飾の方に重きがかかり、いわゆる表現が機能と離れていく。そういう時代を通過してきています。

私自身、それはいかなる場合においても、素材の表現そのものが建築であり、素材と表現は切り離せないものだ、という信念をもっていましたから、いわゆる、ハッタリといえど語弊がありますが、そういうデザイン的な発明だと、ハッタリだと、見栄つぱりとかいうものを、師匠の中村順平から、非常に強く戒められていました。しかし遡れば、その源流は曾禰・中條事務所にあるわけです。この事務所で私が体得した一番のものは、「真実—モラル」であるということです。ハッタリや見栄は絶対に許せない。

「自由」でありながら「奔放」ではなく、当然「堕落」もしていない。「素材」をそのままに生かしながら、「ハッタリ」や「見栄」を一切排したデザイン、それが網戸のモラルであった。第一校舎は、アール・デコの意匠を取り入れながら、決して過度ではなく、全体として白亜のギリシア古典主義の様式と矛盾せずに調和している。それを踏まえながら、網戸の細部へのこだわりをもう少し読み解いていきたい。

※本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号（2015年）に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート（二）クラシックとモダン」の再録となります。

連載**地下壕設備アレコレ【21】****海軍航空無線通信で暗号はどうしたのか? 運営委員 山田譲**

戦時中の海軍は、航空機との通信で暗号を使ったのでしょうか? 私は、一人乗りの飛行機では暗号作成や解読は無理だろうと思っていました。しかし、『暗号はこうして解読された』(原勝洋著)によれば「仮名、数字混用の連送符号と仮名4字の説話符号からなる海軍航空機暗号書F」と「航空通信雑用の小型暗号書C」があったそうです。それがどのような暗号なのかはわかりません。

しかしその後、古本屋で海軍航空通信や基地航空隊での通信について体験者が書いたものを見つけました。地下壕設備のことではありませんが、地下の通信室での通信の様子がわかるので、この本に書かれていたことを紹介したいと思います。

(1)『雷撃機電信員の死闘』(松田憲雄著) より

筆者の松田氏が搭乗した97式艦上攻撃機は、魚雷攻撃または水平爆撃のための空母艦載機でした。3座式で前席操縦員、中席偵察員=機長、後席は電信員で後方旋回機銃の機銃手を兼ね写真撮影もします。松田氏はこの電信員でした。速力は遅くて最高速度378km/時でした。

空母艦載機としては他に99式艦上爆撃機があり、これは2座式、固定脚で急降下爆撃機です。最高速度387km/時で前方機銃と後方旋回機銃を装備していました。両機とも真珠湾攻撃に使用されました。戦争後期には旧型のため戦力になりませんでした。

松田氏のこの回想記からいくつか、紹介します。

①使用電信機は「空3号航空用無線電信機」で、「水晶を電信機に差し込む」とことで、この水晶片により送受信の周波数が決まります。『元軍令部通信課長の回想』(鮫島素直著)によればこの「空3号」には、昭和12年採用、16年採用、17年採用の3機種があり、3座機用で電信電話兼用、短波・長波両用で、17年採用型は中波も使えるとのことです。

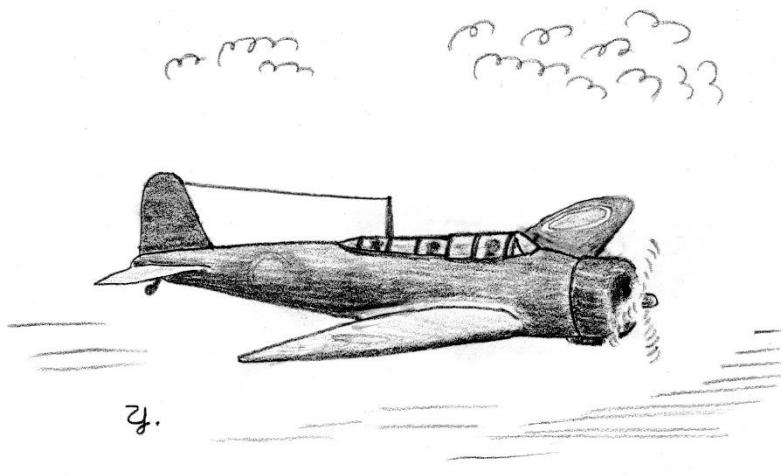
②機内通話には伝声管を使います。艦船の傍では発光信号機(オリジス)を使い、モールス符号で発光通信します。艦船からは旗流信号(マストに信号旗を掲げる)も使われました。

③搭乗時には、暗号書、略符号表、受信板・受信紙を携行します。

④略符号の例としては、トツレ連送は、「突撃準備体形つくれ」。ト連送は「全軍突撃せよ」。R(・ー・)は「了解」ということでした。

⑤横須賀通信学校(後に久里浜に移転)の第49期普通科電信術練習生として松田氏は訓練をうけました。受信筆記訓練は1分間に90字で、誤字、脱字、冗字(余分な字)があると1字でバッター(海軍精神注入棒で尻打ち)1回の懲罰をうけたそうです。最高38回やられたといいます。航法訓練もやりました。

⑥戦闘の最中にも「理由のない制裁」があり、「海軍の不合理な一面で今でも思い出すと不快になる。」と書いています。



97式艦上攻撃機

- ⑦実際の通信文としては、昭和17年4月5日コロンボ爆撃の時、索敵機（偵察機）から受信した暗号文を翻訳（解読）したものとして「敵見ゆ 地点…… 敵は空母1 駆逐艦を伴い南下中 速力……ノット」と書かれていました。「当時は無線電話でなくモールス通信を翻訳」したことでのことで、戦争後半には、無線電話も使われたということのようです。
- ⑧長文の暗号文も送受信していて、「モールス符号を…50語、100語、長文の数字」「索敵機からの敵情電を『瑞鶴』から全飛行機隊に転送」「敵は新型空母1、戦艦1、巡洋艦3、その他8、進路10度、速力20ノット、地点アイ57、0550（午前5時50分）」「味方部隊、0625（午前6時25分）から進路190度、速力15ノットに変針」という通信文を受信したそうです。

（2）『海軍電信兵戦記』（大澤明彦著）より

大澤氏は基地航空隊勤務でした。はじめ木更津基地にて、その後、南方を経てフィリピン・ミンダナオ島に送られ、山中を敗走しました。敗戦となり、投降して捕虜生活を送った後、帰国・復員しました。この回想記の記述も、いくつか紹介します。

①電信用紙には以下の項目がありました。日付、受信者、発信者、種別（至急、親展など）、本文です。本文が和文だと「ホネ」と記され、終わりに終止マーク「・・・ー・」がつきます。欧文・数字だと「メ」と記され、終わりに「シ・ー・ー・」がつきます。暗号文は4桁か5桁の数字をならべるので、この後者の形になるわけです。

しかし、この終わりマークには、筆者は強い思いがあり、そのことを書いています。「これにて連絡を終るとする場合は『終わりマーク・ツー』と打つ。玉碎の直前に、この信号があつて……悲しい思い出」だというのです。「離島での悲惨な玉碎の報（コレニテレンラクラタツ、サヨナラの平文を最後に連絡を絶つ）」「この間まで滞在していたペリリュー島の陸軍部隊司令部から平文電報が発せられ、ちょうど私が当直の時に受信した。…何かぞつとするような鬼気迫るものを感じた。」と書いています。平文（ひらぶん）とは暗号でない文面です。

- ①木更津基地での当直では、「電文は暗号員に回され、平文に直して掌通信長（兵曹長）から通信長、司令へと報告される。」（掌とは次席、副のこと）
- ③「東京通信隊が全海軍部隊に、24時間連続休みなしに打つてくる放送電報（第一放送周波数8350キロサイクル、第二放送同9260キロサイクル、第二は主に気象と潜水艦情報）」があり、「全海軍部隊への作戦命令、情報などがわかる」
- ④、大澤氏は、昭和19年3月30日、ミンダナオ島ダバオ第一飛行場電信兵に配属され、7月には、同島北部カガヤンに移動して、地下電信室を設営しました。発電機と大型通信機は地上の小屋に設置して、地下には小型航空用無線機と照明器具をそなえました。アンテナは堅穴をあけて地上とつないだとのことです。
- ⑤しかし20年3月、カガヤンを撤収し、山中に逃避行です。8月22日、敗戦の連絡が届き、9月2日に投降して捕虜生活を送りました。その後、カガヤン収容所からレイテ島タクロバン収容所へ移されました。しかし12月28日に帰国でき、浦賀に上陸したそうです。岐阜の親の避難先に到着したら、母親はびっくりして腰を抜かしたそうです。「戦後の生活は、飢餓と貧困のどん底にあえぎ、戦争による後遺症は、これから長い間、つづくことになるのである。」と、この回想記は結ばれています。

活動の記録 2018年2月～4月

- 2/12(日) ガイド学習会(菊名フラット)
- 2/24(土) 定例見学会 43名(高校生4名 小学生4名)
- 2/27(火) 地下壕見学会 横浜市立大綱中学校2年生 110名
- 2/28(水) 地下壕見学会 同 116名
- 3/5(月) 地下壕見学会 同 120名
- 3/2(金) 地下壕見学会 ディスクロージャー学会 32名
(見学用懐中電灯10本頂きました)
- 3/10(土) 第2回 ガイド養成講座(来往舎大会議室)
- 3/12(月) 地下壕見学会 田園調布学園 36名(高校3年生12名)
- 3/14(水) 定例見学会 60名
- 3/17(土) 平成29年度港北区地域のチカラ最終報告会(来往舎シンポジウムスペース)
- 3/24(土) 定例見学会 55名
- 4/2(月) 平和のための戦争展川崎・横浜実行委員会(法政第二高校教育研究所)
- 4/3(火) 運営委員会(来往舎205号室)
- 4/7(土) 第3回ガイド養成講座 フィールドワーク 日吉キャンパス周辺・
日吉の丘公園周辺 地下壕出入り口を巡る)
- 4/11(水) 定例見学会 47名

4/14(土) 第12回公開講座
(来往舎 シンポジウムスペース)
「日本の戦争遺跡の調査研究と保存運動
— 神奈川県の地下壕を中心に—」
講師 十菱駿武氏
(山梨学院大学法学部政治行政学科客員教授)

※慶應義塾キャンパスを中心としたアジア太平洋戦争期の遺構は、戦争遺跡と呼ばれ、貴重な学びの場です。戦争遺跡を保存する動きは、およそ30年前から、日本各地で盛んになりました。今回、戦争遺跡保存全国ネットワークの共同代表として、発足以来先頭にたつてこられた十菱氏に、保存運動についてお話し頂きました。次号135号にて詳細の報告をいたします。



来往舎シンポジウムスペース(下記)
にて講演される十菱氏





銀杏並木奥の記念館は現在建替え工事
中のため取壊されました
(新日吉記念館は 2020.3 竣工予定)



春に芽吹いたイチョウの葉も大きく育ち、
いよいよ新緑の季節の到来です♪♪
(ゴールデンウィークの日吉キャンパス銀杏並木)

★地下壕の定例見学会は予約申込が必要です。原則として毎月2回実施（第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分 所要時間2時間半）

★都合により変更する場合もあります。8月は1日(水)・4日(土)・8日(水) の予定

★申込お問い合わせは見学会窓口まで

Tel・Fax 045-562-0443 喜田（午前・夜間）

★定例見学会予定

5／9(水)（定員を超えました）・ 5／26(土)・ 6／13(水)・ 6／23(土)・ 7／11(水)・
7／28(土)

7月下旬～8月上旬に夏休み見学会を数回実施します。（8月11日～31日まで見学会はありません）

連絡先（会計）亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
(見学会・その他) 喜田美登里：横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
ホームページ・アドレス：<http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

発行 日吉台地下壕保存の会

代表 阿久沢 武史

日吉台地下壕保存の会運営委員会

(年会費) 一口千円以上

郵便振込口座番号 00250-2-74921

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会